

● 2月選評

小島なお

・郡司和斗（茨城県）

方法論で驚く時代は

葡萄のようにみずみずしくて

黒く光って

論理や技術。かつてもてはやされた方法論に私たちはもう驚かない。けれど、黒々と艶めく葡萄は、方法論の先へ伸ばそうとする手を濡れながら誘惑する。

・松下 誠一（東京都）

上質なテトリスみたく言いあえば

ワイパーのいらなくらい雨

二人の間に生まれた隙間や溝を、順に互いの言葉で埋めてゆく。認識のずれが消失したり積み上がったりに熱中する二人を取り囲む豪雨。

・うずたろう（埼玉県）

いちねんはさよならばかり

ふくよかにふる

八月のあたたかい雨

人にさよなら。季節にさよなら。今にさよなら。別れを繰り返し取り残された私という空洞。空間があってはじめて雨は注がれる。

・青野陽（熊本県）

天使の列がつくるブレーカー

ぜんぶ落ちたら運動会が始まる

分電盤のなかに整列する安全ブレーカー。つまみひとつが一体の天使。ひとり落ち、ふたり落ち。真っ暗になった部屋で幻想の遊びがはじまる。

・氷丸（茨城県）

席替えて一番前を選ぶ子の

パンデイキュレーション

『アダムの創造』

パンデイキュレーションは「心地よい寝覚め」の意。ミケランジェロの描いた神とアダムは、現代の教師と生徒たりえるのか。最初の人類の後ろに連なる僕たち。

・植村 日向（愛知県）

側溝をすり抜けてゆく寄る辺たち

瞼に空を挟んでみたい

細くて暗い側溝をゆく寄る辺。それは時々、実家の形をしていたり、配偶者の姿をしている。瞬きに寄る辺たちもこの空もずっと留め置くことができたなら。

・大嶋 碧月（石川県）

蛞蝓が冬に消えたらあとは梅雨

差別用語を使わずにおく

目に見えているのはかならずしも本質ではない。六月の雨にはなめくじが、なめくじには冬が微かに混じりあって存在しているゆえ。

・汐見りら（東京都）

初恋は淡水に棲む

かにばんをゆつくり  
解体していく夜更け

塩分濃度の低い淡水に息づく初恋。それは裂いても裂いてもどこまでもパンで  
しかないかにばんの朗らかな行き詰まりにも似ている。

・花やしき（東京都）

しんしんと春の霧雨

降り積もる

考古学者も知らない地層

霧雨によって生まれる春の地層。そこからいずれ出土するものはなにか。後の世  
の誰にも検証しえないもの。ごく個人的な生活にまつわる感情の歴史を思う。

・白石 孝成（広島県）

僕の泣き声が蜂の巣からする

蜂の巣にひしめく無数の部屋。どの部屋で僕は泣いているのだろう。たったひとり  
の女王を護るために生きて死ぬ僕の過去世来世は今とどれほど違うのだろう。